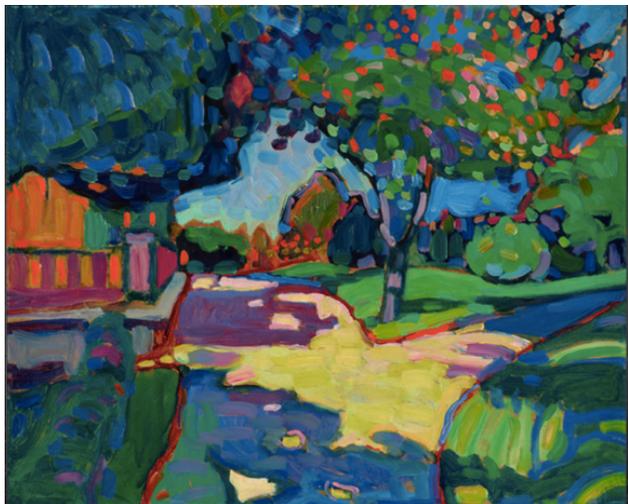


カンディンスキーとクレー

〈6F、5F〉

ARTIZON MUSEUM

作品をよく見て、質問に答えてみてね。



Q1. 左の絵には、なにが描かれているかな？
木や空が見えるね。ほかになにが見える？

Q2. どの季節かな？絵の中のどこからそう思う？

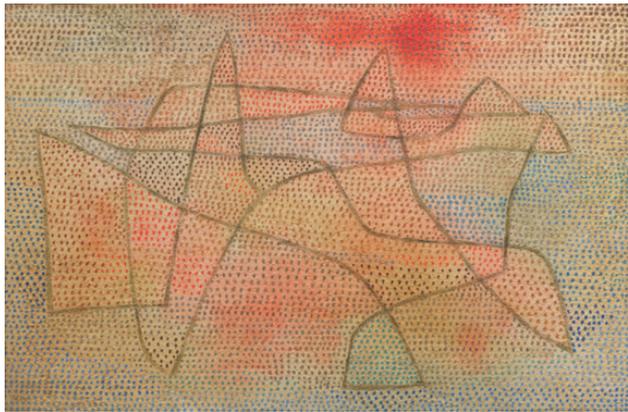
ヴァシリー・カンディンスキー 《3本の菩提樹》
1908年、油彩・カンヴァス

Q3. 右の絵の中に、知っているかたちはある？
そのかたちは、何かに似てる？ 遊ぶもの？ 食べもの？

Q4. この絵も、上の《3本の菩提樹》も、
ヴァシリー・カンディンスキーという画家の作品です。
2つの絵の色の塗り方は、どういうところが違うかな？



ヴァシリー・カンディンスキー 《自らが輝く》1924年、油彩・カンヴァス



パウル・クレー 《島》1932年 油彩、砂を混ぜた石膏・板

Q5. パウル・クレーが描いた、島の絵です。
色が薄いとところと濃いとところがあったり、
異なる色の面と点が重なっているところもあります。
それぞれの色は、何をあらわしていると思う？自由に考えてみてね！

薄い赤は…
濃い青は…

濃い赤は…
薄い茶色は…

薄い青は…
濃い茶色は…



カンディンスキーとクレー

ロシア出身の画家ヴァシリー・カンディンスキー（1866-1944）と、スイス出身の画家パウル・クレー（1879-1940）は、1900年にドイツのミュンヘン美術学校で初めて知り合います。それから30年余りの間、2人は、ともに芸術運動「青騎士」に参加したり、ドイツ、ワイマールの美術学校、バウハウスでともに教えるなど、交流しました。2人は友人で、ライバルでもありましたが、互いに影響を与え合いました。

カンディンスキーは、抽象絵画を誕生させた画家のひとりです。抽象絵画とは、人間の内面や思いなど、目には見えないものを描いた絵のことです。

1904年から1908年にかけて、カンディンスキーは、パートナーのガブリエル・ミュンターとともに、ヨーロッパ各地を巡りました。1908年、彼らはミュンヘン郊外、アルプス山脈に近いシュタッフエル湖畔のムルナウを初めて訪れ、その美しさに魅せられます。2人はその年の夏、画家仲間のヤウレンスキーとヴェレフキンとともに、4人でこの村に6週間滞在し、制作に打ち込みます。《3本の菩提樹》はその夏に描かれました。花をつけた菩提樹が画面中央に立ち、手前から奥へと伸びる道を左右へ分けています。幅の広いリズムカルな筆の動きと、鮮やかな色彩が画面に活気を与えています。

1922年、カンディンスキーはバウハウスの教員となり、《自らが輝く》は、その2年後の1924年3月から7月の間に制作されました。画面左下に画家のイニシャルと制作年が確認できます。大小の円や四角形、三角形、様々な線などの形が重なり合い、立体感のある形と平面的な形とが混在しています。曲線による流動感がユニークです。地の赤をはじめとする鮮やかな暖色と、画面を引き締める黒、そして対照的に柔らかな白で彩られた空間は「自らが輝く」というタイトルを表しているかのようです。

音楽教師を父に持ち、バイオリンも得意としたクレーは、異なるメロディーが同時に進行していく音楽の形式「ポリフォニー」を、絵の中で表現しようとしていました。彼はポリフォニーを目に見えるかたちにするために、面、線、点といった絵を構成する要素を最大限に活かし、混在させました。《島》では、石膏を混ぜて作られた褐色の地肌に広がる、色の濃淡が作り出す面、島を形づくるおおらかな線、一定のテンポを保って規則正しく並ぶ点、という3つの旋律を楽しむことができます。同時に、3つの要素が調和して生まれるハーモニーが、全体に深みを与えています。リズムを刻むように配置された点は、クレーがかつて地中海に面したアフリカ北部の国、チュニジアへの旅行で目に焼き付けた、海面と島に反射する光を象徴しているのかもしれませんが。

ご自宅から大きな画像を見たい方は、
「カンディンスキー」「クレー」で検索！

